

直線ゆえまだ学校まで距離があるが校舎がうつすらと見える。この直線にはいればもう少しで学校だ。そして直線に入るといつも必ず、

「よう、課題終えた？昨日の問題結構量多かったじゃん」

「一応」

後ろから気さくな声で話しかけられる。

緒岸は立ち止まり、声の主が隣に来るのを待つ。声の主は軽快な足取りで前に出てきた。

メガネをかけたその学生は手を合わせ申し訳なさそうに緒岸に言った。

「最後の問題意味不明だったから教えて」

「黒田お前、前回もそんな感じでめんどくさい問題だけ意味不明と言ってたよな？」

「気のせいだよ、気のせい」

黒田と呼ばれた学生は緒岸の隣に並ぶ。基本的に同じ場所、同じ時間で合流する。最初は離れるだろうと思っていたが一年以上も続くのは驚きだ。

二人で登校する事で課題の提出率が上がる、今日の内容の確認ができる、を目的に始めたが最近はこちらかがどちらかの課題を

写すような要求か、学校と関係ない話で盛り上がることが多い。

合流してからしばらく歩き続けるとくたびれた校舎が見えてきた。最近一部を改築するなんて話があるが、真偽のほどが定かではない。

一応この周りでは歴史がある方らしいと耳に胼胝（タコ）ができるほど緒岸は親戚から聞かされていたが、崩壊する前に新しくしてくれと思うばかりである。

校舎に入り、廊下を歩く。人が行き交う廊下の中、今日も一日がんばりますか、と教室に二人は入り準備を始めた。



昼の暑さが落ち着き、心地よい風が教室を吹き抜ける中、最後の鐘がなった。

ERが特に何かあるわけではなく、明日の予定などを淡々と先生が話している。強いて言うなら最近あった失踪事件について注意があった。

先ほどの淡々とした話し方から打って変わって抑揚をつけながら話し始めた。聞いてほしいと言う思いを緒岸は感じた。

「失踪事件でどう思う？あり得ると思う？」

先生の努力にも目をくれず、ER中黒田が声を絞って囁いてきた。

「まあ……、何かはあるよね、先生たちが怪しいけど」

「だよなあ、担任の様子を見るに一部の先生のみ加担してそうだけど」

「確かに、人数的にも結構人で入りそうだけだね」

怒られないギリギリの声量で二人は軽く話し合う。ギリギリの声量とはいえ先生にはバレてしまい、中断させられてしまった。

「では、終わります」

先生の号令で今日の集団活動は幕を閉じた。

生徒が一斉に羽を伸ばす。各々の部活へ行く生徒、帰宅する生徒皆散り散りになる。

「今日用事があるから帰るわ」

「うい」

黒田は用事があるらしくそそくさと教室の外へ歩き出した。緒岸はひらひらと手を振り申し訳程度に見送った。

用事が何かは気になるといえば気になるが聞いたところで特に何かあるわけではないよなと基本的に緒岸は干渉しない。別れた後、緒岸はいつものようにある部屋へと歩き出した。